

豊後大野市内遺跡 発掘調査概要報告書 9

— 平成 29 年度調査 —

2019

豊後大野市教育委員会

例　　言

1、本書は平成29年度に豊後大野市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて実施した市内遺跡事業の確認調査概要報告書である。

2、調査の体制は以下のとおりである。

調査指導 田中裕介（別府大学文学部教授）

　　杉井 健（熊本大学文学部准教授）

　　重藤輝行（佐賀大学芸術地域デザイン学部教授）

　　林 正憲（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員）

　　越智淳平（大分県教育庁文化課）

調査主体 下田 博（豊後大野市教育委員会教育長）

調査担当 廣瀬宏一（社会教育課長）

　　高野弘之（社会教育課文化財係長）諸岡郁 安部一真 豊田徹士 大野幸則（同文化財係）

このほか、吉田和彦氏（杵築市教育委員会）、井大樹氏（大分県立埋蔵文化財センター）のご視察・ご助言をいただいた。

3、重政古墳の調査における遺構実測およびトレイス、墳丘測量図作成については別府大学考古学研究室生の協力をいただいた。また、発掘調査は別府大学の「埋蔵文化財実習II（遺跡発掘）」の授業として行った。写真撮影は調査員が行った。

4、重政古墳の調査基準設置については(株)システムサポートに委託した。

5、本書の執筆は重政古墳第1次調査について田中裕介氏・池田亘・小松義博・吉岡拓哉氏（別府大学考古学研究室）、墳丘測量については玉川剛司氏（別府大学文化財研究所）より玉稿をいただいた。その他の執筆は調査担当が行い、編集は諸岡が行った。

目　　次

I はじめに ······ ······ ······ ······ ······	1	III 鎌倉北遺跡（神戸口・辻墓地） ······	19
II 重政古墳 ······ ······ ······ ······ ······	3	IV 一千庵遺跡 ······ ······ ······	26
1 調査の経過 ······ ······ ······ ······ ······	3	V 下自在東遺跡 ······ ······ ······	27
2 墳丘測量調査 ······ ······ ······ ······	4	VI 原田第2遺跡 ······ ······ ······	28
3 重政古墳第2次調査 ······ ······ ······	11		

I はじめに

1 調査に至る経過

大分県豊後大野市は、平成17年3月に大野郡7町村が合併して成立した。その市域は広大で、大分県南部の大野川中流域のほぼ大部分に相当する。結果、豊後大野市内には先史から近代に至る様々な歴史・文化遺産を有することとなり、それは約500件の指定文化財や約700箇所の周知遺跡数に表われている。これらの保護について合併前の各町村時代から引き継いで取り組まれているが、特に市域の広域化と同時に各種開発工事も増加し、比例して埋蔵文化財調査の対応件数も増加傾向にある。

豊後大野市教育委員会は国庫・県費の補助を得て、各種開発工事に対する遺跡の保存に向けた協議資料作成の調査と並行して、主要古墳などの範囲確認のための発掘調査を実施している。平成29年度は遺跡範囲確認として重政古墳で墳丘測量および発掘調査を実施し、緊急開発工事に伴う調査は鍋倉北遺跡、一千庵遺跡、下自在東遺跡、原田第2遺跡の4箇所で実施した。

重政古墳は過去の1次調査では不明な点が多いため2次調査を行い、一部のトレーナーで周溝や段築などの遺構を検出することができたが、規模形態の把握を目指して来年度以降も継続して行うこととした。

開発工事に伴う調査として一千庵遺跡、下自在東遺跡、原田第2遺跡では試掘を行ったが、特に遺構・遺物は出土せず工事実施となった。鍋倉北遺跡については近世墓地2箇所を確認したが開発計画の変更により遺跡の保護が図られこととなつたため、墓石の配置や銘文の記録を行った。

これらの発掘調査の他、主体部遺構の残存状況確認のために地中レーダー探査業務を平成28年度から継続して行っている。2か年で三重地域前方後円墳6基を実施したが、詳細は後日の報告に期したい。

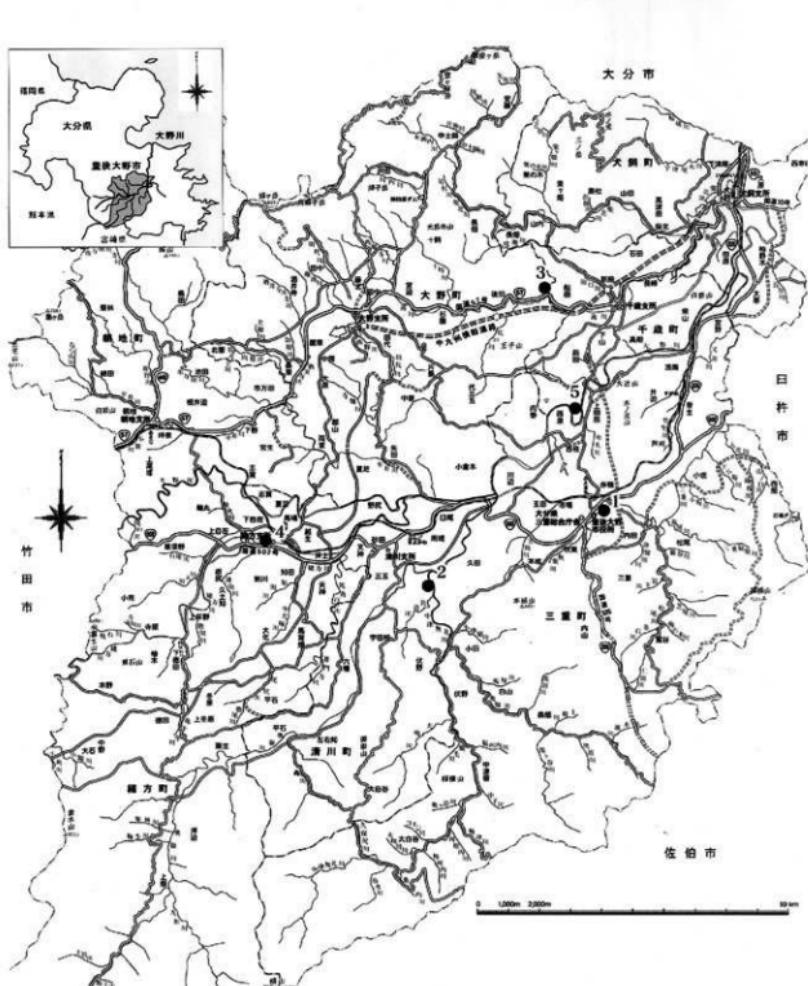
2 歴史的環境

大野川中流域には阿蘇溶結凝灰岩による台地や、大野川本流及び支流による沖積平野などの地形が随所に見られ、これらの地形上に数多くの遺跡が所在している。

旧石器時代の遺跡は国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡など著名な遺跡が多く知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・惣田遺跡、晩期の大石遺跡・宮地前遺跡などで良好な遺構や遺物などが確認されている。

弥生時代では特に後期に大規模集落として多くの遺跡が各台地上でみられる。200基を超える堅穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、高松遺跡・高添遺跡・二木本遺跡・陣箱遺跡など多数知られている。県下でも代表的な遺跡集中地域であるが、古墳時代以後になると集落遺跡は減少し、生活の痕跡は台地上から谷底平野への変化がみられる。しかし墳墓の遺跡は多く、市内には8基の前方後円墳をはじめ、各河川流域の単位で古墳群が築造されている。特に前方後円墳6基が集中する三重川流域周辺を中心に、平井川流域周辺に円墳群、緒方川流域等に横穴墓群など数多くの古墳・横穴墓の分布が知られている。

歴史時代以後について、市域は豊後國大野郡の大部分に含まれる。条里跡と推定される地割が緒方平野で確認され、磨崖仏や石塔類などの石造物が多く所在する。遺跡調査例としては古代の遺跡は古市遺跡等で行われているのみであったが、近年加原遺跡で古代の建物群跡などが確認され、郡衙関連の施設跡と推定される。中世になると建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、松尾城や高尾城など山城をはじめ、上門出遺跡や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。近世は臼杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



第1図 平成29年度 市内遺跡調査位置図

No.	遺跡名	遺跡名	調査機関	調査内容
1	重政古墳	三重町内田字重政	2017.12.19 ~ 2018.1.23	範囲確認調査
2	鍋倉北遺跡	清川町宇田枝字神戸口・辻	2017.6.16 ~ 2017.7.20	測量調査
3	一千庵遺跡	大野町後田字一千庵	2017.9.28 ~ 2017.9.29	太陽光発電施設建設
4	下自在東遺跡	緒方町馬場字大石	2018.2.6 ~ 2018.2.6	公共施設建設
5	原田第2遺跡	千歳町前田字入津原	2018.2.8 ~ 2018.2.8	太陽光発電施設建設

II 重政古墳

1 調査の経過

三重町中心部を見下ろす標高157mの台地端に所在する前方後円墳である。市立三重中学校の敷地内で、後円部に一部削平がみられる以外は墳丘の良好に保存されている。大正時代には三重地域の主要な前方後円墳の一つとして報告され、併せて明治時代に盜掘を受けた際に遺物出土の伝承があるものの行方不明となっていることなども紹介されている⁽¹⁾。その後昭和48年に大分県史跡に指定され、現地踏査による墳丘の考察などが行われている⁽²⁾。

調査は学校施設整備に伴う史跡保護のため実施されており、平成6年度に測量調査によって全長52mを測る規模と、柄鏡状の前方部形態であることが確認された。翌7年度にはトレンチ3箇所(第1~3トレンチ)による確認調査(1次調査)が行われ、第1トレンチより葺石の存在を確認し、壺形埴輪の破片が出土したが、攪乱により周溝や墳端などは判断できない状況であった。第2・3トレンチでは遺構は全く検出できず、グランド造成により墳丘東側は大きく掘削を受けていることが判明した⁽³⁾。

またこの頃には壺形埴輪の底部破片が採集されていることが明らかとなり、形態から5世紀初頭と推定されている⁽⁴⁾。近年豊後大野市域の古墳群の資料が増えつつあり、これまで不明であった首長系譜などの考察が行われ、市内三重川流域の古墳群の一つとして注目されるようになる⁽⁵⁾。

1次調査以降しばらく調査は行われず、古墳の規模や形態については不明確のままであったため、別府大学の協力により市内主要古墳の範囲確認のための調査を進めるにあたり、平成29年度より重政古墳の調査に着手した。

- 註 (1) 本莊昇・前田多三郎1924「三重郷の史蹟」「大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告」第三輯
(2) 玉永光洋1987「古墳時代」「大分県三重町誌総集編」三重町
(3) 諸岡郁嗣1997「三重地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ」三重町教育委員会
(4) 田中裕介1995「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期(上)」「おおいた考古」第7集
(5) 田中裕介2009「豊後大野市三重地域の首長墓とその動向」「地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退官記念論文集」



第2図 重政古墳周辺地形図

2. 墳丘測量調査

別府大学文化財研究所 研究員 玉川剛司

1. 墳丘測量調査に至るまでの経過

重政古墳は、豊後大野市立三重中学校が所在する重政原と呼ばれる台地から東西側に張り出した尾根上に立地する前方後円墳である。古墳の主軸は、ほぼ東西方向で前方部は東側の三重盆地の方に向け築造されている。重政古墳はこれまで、諸岡氏が作成した実測図(諸岡1990)のみであったが、1994年に三重町教育委員会(現豊後大野市教育委員会)が墳丘測量調査を実施した。その際に作成された測量図は、25cm間隔の等高線図である(諸岡1995・1997)。以上のような墳丘測量調査を経てきた中、豊後大野市では、平成22年度から市内所在の前方後円墳を対象とした、精緻な測量図の作成および、墳丘規模・周溝の有無等の確認の発掘調査を目的としたプロジェクトの一環で、改めて墳丘測量調査を実施する運びとなった(玉川2012・2014・2015・2016)。

今回実施した墳丘測量調査は、市教育委員会の依頼のもと、デジタル機器を用いた変化点測量法(玉川2003・2004)で行った。調査実施にあたり、あらかじめ市教委が準備した計2本の世界測地系の座標による基準点⁽¹⁾とともに必要に応じて補助杭を設定した。

墳丘測量調査は、別府大学文化財研究所の玉川剛司の指導のもと、塙見恭平、高木慎太郎、竹永昂平(別府大学大学院文学研究科1年)、井手基子、吉岡拓哉(別府大学史学・文化財学科4年)、佐伯孝央、清水航平(同3年生)が参加した(所属等は2017年4月時点)。なお、測量調査期間は、平成29年5月12日から6月28日の計9日間である。測量範囲は、墳丘部を中心に4866.829m²を対象とし、計測点は墳丘部及び周辺地形を合わせると計3,983点であった。なお、今回の測量調査の成果として、25cm間隔の等高線図を作製した(第3図)。

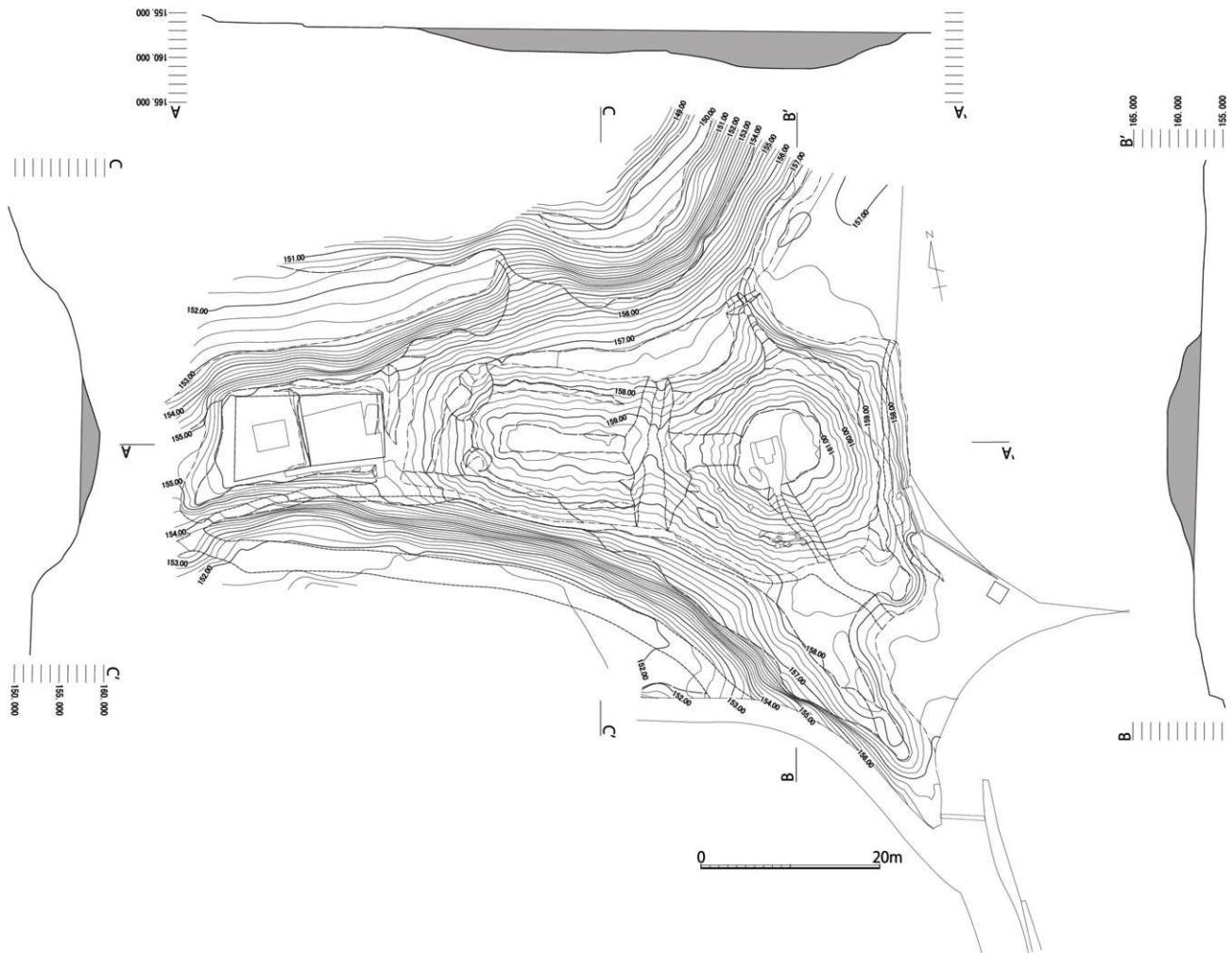
以下、調査の成果について述べていきたい。

3. 墳丘測量の内容と成果(第3~5図)

後円部

墳端の現状をみると、北側に幅1m程の土橋状に削平を免れ、墳丘斜面と墳端の一部が確認できるものの、その西側からくびれ部にかけては、墳端と墳端から高さ1.5mにかけての墳丘斜面が里道の造成により大きく削平されている。また、土橋状に残る墳端部分から墳丘の南東側にかけては、グランドの造成により墳端及び墳丘斜面が削平され、墳端と墳端から1.5mの高さまでの墳丘斜面が改変を受けている。これら削平されている範囲の中で、墳丘南東から南側にかけては、墳端の傾斜変換線が比較的良好に遺存している。しかし、墳端の一部直線的に廻っていることから、墳頂部の石殿に取りつくための参道を設ける時に、一部削平されているものと考えられる。また、墳丘南側からくびれ部にかけては、墳端が75cmほど落ちており、墳端ラインから158.000mの等高線前後の墳丘斜面が弧を描かず直線的となっていることから、里道造成にともなう削平を受けていると考えられる。

墳丘斜面については、段築の痕跡と考えられるテラスが4箇所で確認できる。これら4箇所のテラスの内、くびれ部側の標高159.000m前後の等高線に沿って、墳丘北側に幅2m、長さ3m、南側の斜面に幅1.4m、長さ3mの2箇所のテラスがみられる。また、墳丘北側では、土橋に残る墳丘斜面から東側にかけて、標高159.000m~159.500mの等高線に沿って幅2mのテラスが確認できる。南側の参道から西側でも、標高159.250m~159.500mに沿って幅1m、長さ5mのテラスがみられるが、鳥居の破片や石材が散乱していることから、本来あった平坦面を利用したものと考えられる。これら4箇所のテラスは、4箇所とも標高159.000mの等高線前後であることから、段築である可能性が高いと考えられる。また、墳頂部から西側のくびれ部にかけての斜面では、隆起斜道が確認できるが、くびれ部が里道の造成により掘削状に削平を受けている。



墳頂部は、石殿があるものの上端の傾斜変換線がほぼ円形に廻っており、等高線も大きく乱れていないことから、良好に遺存しているものと考えられる。墳頂部の最高標高は、161.349mである。

以上の状況から後円径について考えたい。まず、墳丘北側の土橋状に遺存している墳端(標高158.250m)。次に、墳丘南側の里道が段落ちする東側上段の等高線158.250mを通る墳端。これら2箇所の墳端を通る、直径30mが後円径であると考えられる。

以上をまとめると、後円部は2段築盛で、後円高3.1m、後円径30mを測る規模であったものと想定できる。

くびれ部

くびれ部は、後世の里道造成により、最大6.8幅m、深さ0.3mの掘削状に削平されており、現状では本来のくびれの位置も明確には確認できない。そこで、後円部の径と等高線の形状から、くびれ部の規模等について考えていきたい。前述した後円部の後円径と、前方部から廻る等高線をみると、南側くびれ部については、掘削状の上端ラインよりも2.5mほど後円部側で、標高158.250mの等高線に接する箇所であると考えられよう。一方北側の現状でのくびれ部は、里道の後円部側の上端ラインと墳端が接する地点から後円部側に1.3mの付近がくびれ部となる。墳丘の南北のくびれ部同士を結ぶくびれ幅は、16mとなる。しかし、後円部が大きく削平され、さらに前方部から続く墳端の傾斜変換線と等高線がくびれ部に向かうにつれて墳丘側に抉れているなどを考慮すると、現状のくびれ位置である可能性は低いものと考えられる。むしろ、南側のくびれ部の位置を墳丘主軸で反転した、北側くびれ部16.9mがくびれ幅となる可能性が高い。

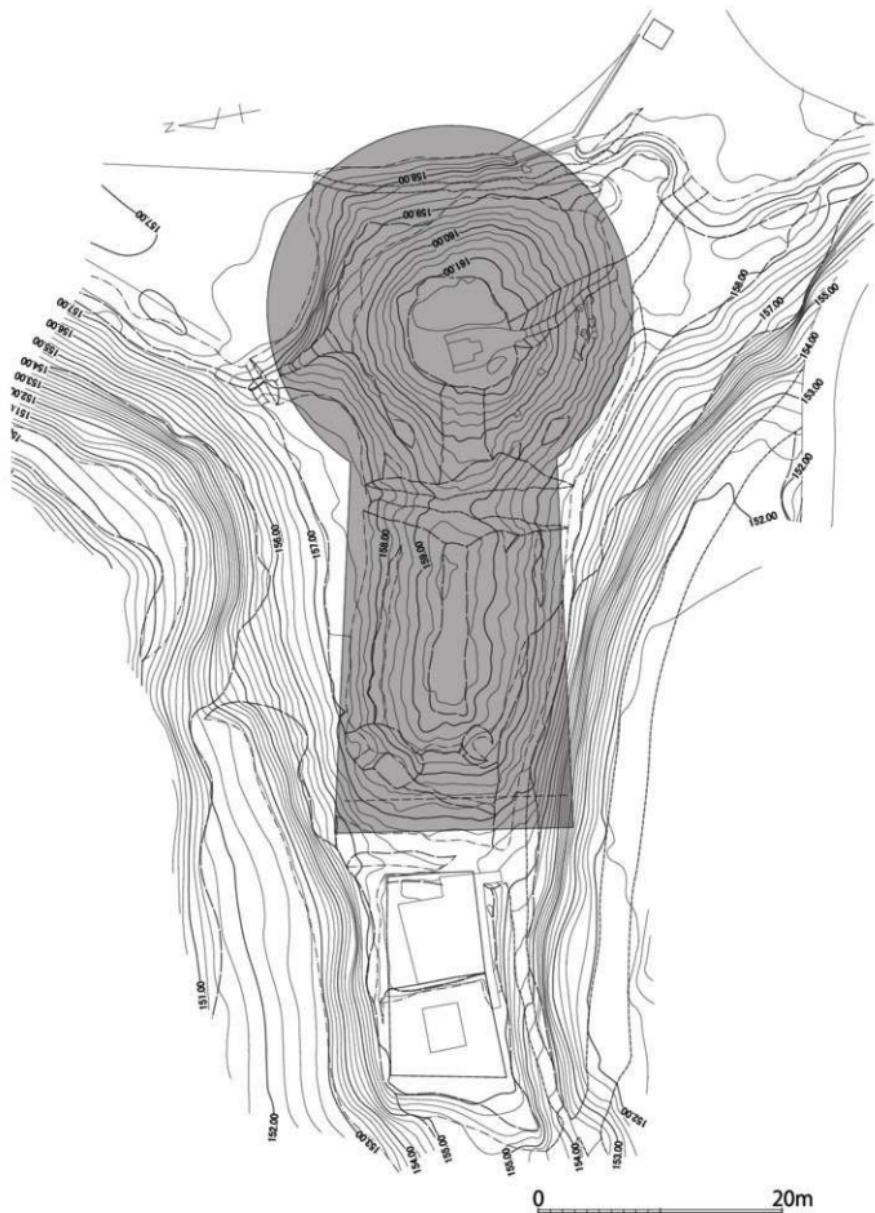
これら想定した墳丘南北のくびれ部の位置は、里道の掘削ラインよりも後円部側の標高159.750mの等高線が廻る位置となる。この位置の等高線をみると、標高160.000m以上の等高線は間隔が狭く、159.750m以下の等高線の間隔が広くなっていることからも想定したくびれ部の位置と符合する。つまり、墳丘南側で確認したくびれ部の墳端と標高159.750mの等高線との差、1.75mがくびれ高であると考えられる。くびれ部の段築については、確認できなかった。

くびれ部の位置については、今後発掘調査による確認が必要であろう。

前方部

前方部南側は、6m下の里道を掘削する際に、墳端の大半は消失しており古墳築造当初の状況はほとんど残っていない。くびれ部の里道掘削に伴う掘削の前方部側の上端ラインと墳端が接する地点から6m西側までは、比較的良好に墳端の傾斜変換線が遺存している。また、墳丘斜面には、2箇所のテラスが確認できた。1つ目は、くびれ側の堀削の西側上端ラインから長さ6.3m、幅0.6mのテラスで、標高158.000m等高線前後で並行してみられる。2つ目のテラスは、一つ目のテラスから2.5m西側から前方部端にかけて幅0.8mのテラスで、標高158.250m～158.500mの等高線間に並行している。1つ目のテラスは、墳頂部上端ラインと先に述べた遺存している墳端ラインと並行していることから、段築の可能性が高い。一方、2つ目のテラスは、墳頂部上端ラインと比較すると、若干前方部端側寄っていることから段築である可能性は低いものと考えられる。しかし、前方部端側に廻ることを考慮すると、本来の段築の位置に近いが、後世の里道の一つとして機能したテラスであると思われる。

前方部北側の墳端ラインは、比較的良好に遺存している。復元したくびれ部側から14.3mまでは墳端ラインが墳丘側に若干抉れているが、標高157.250～157.500mの等高線前後で並行し、前方部端に廻っている。また、墳丘斜面には、標高158.000m～158.500mの等高線に並行して幅1mのテラスが確認できる。このテラスは、墳頂部の上端の傾斜返還線とも並行し、墳丘南側で確認した段築の標高と平面位置とも一致し、前方部端側にも廻っていることから段築であろう。しかし、この段築は、くびれ部側の掘削の上端ラインの手前までしか確認できないため、くびれ部の段築への接続については墳丘南側とも不明である。



第4図 重政古墳墳丘復元図 (S=1/400)

前方部端では、墳端ラインとその墳丘側に2段のテラスが確認できる。しかし、墳丘北側の隅角と思われる地点は、風倒木痕等で等高線が乱れている。現状の墳端ラインは、標高156.750mの等高線と並行していることから、墳丘北側の墳端ラインの標高と現状で0.75mもの差が生じ、水平には墳丘北側と前方部端側の墳端ラインとか接続しないことが第3図からもわかる。しかし、この前方部端側の墳端ラインよりも3.5m上段にある幅の狭いテラスが存在し、標高157.500mの等高線と並行していることから、風倒木痕で現況地形が大きく乱れているものの、本来墳丘北側の墳端ラインと接続していた可能性が高い。このテラスの下端ラインと、墳丘北側の墳端ラインが交わる地点が隅角であると考えられる。この隅角と墳丘主軸で反転復元した19.3mが前方幅で、前方部長は27.5m程になる可能性がある。また、墳端ラインよりも上段には、幅0.5m程のテラスが標高158.500mの等高線前後でみられる。風倒木痕により現状では接続していないが、墳丘北側で確認した段築のラインと接続することから、このテラスは段築であると考えられ、前方部は後円部と同じく2段築盛であるといえる。先に述べた墳端ラインよりも外側にみられる現状の墳端ラインについて考えていく。このラインを本来の前方部端の墳端ラインであると仮定すると、前方部端側のみ3段築盛となり、前方部北側と南側の段築と整合しない。このことから、墳端外側のテラス面の存在を考慮する必要がある。この墳端ラインまでを考慮すると前方部長30.4mを測る可能性がある。今後、このテラス面も含めた、墳端確認の発掘調査が必要であろう。

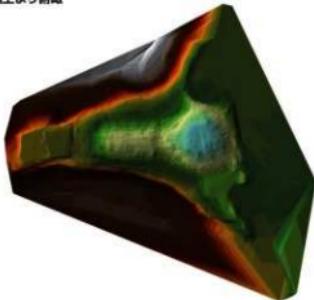
墳頂部については、幅2.7mと狭いのが特徴で、等高線と傾斜変換線に大きな乱れもなくほぼ平坦であることから、良好に遺存していることが窺える。前方部高は、2mである。

測量成果のまとめ

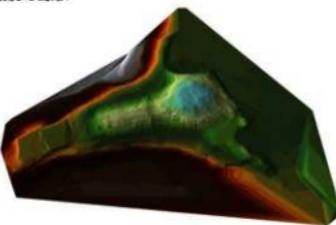
これまで述べてきた測量調査の結果を基に、墳丘の復元案として第4図を作製した。この図を基に各部位の詳細についてみていく。

後円部は、墳丘北側から西側にかけて墳端ラインが後世による削平によりほとんどが消失している。その中でも築造当初の墳端が残っている可能性がある個所が、今回の測量で一部確認できた。その個所を基に後円部を復元する

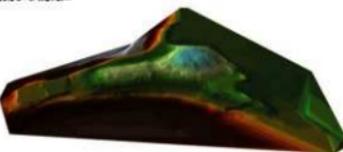
1 真上より俯瞰



2 南側より鳥瞰1



3 南側より鳥瞰2



4 南側より真横



5 南西側からの仰視



6 北西側からの仰視



第5図 重政古墳の測量計測データ3D図

と、後円径30mを測る2段築盛で、後円高3.1mであると考えられる。

くびれ部については、里道の掘削により後円部と前方部が切断されているものの、若干前方部よりに掘削が寄っていたため、墳丘南側でくびれ部の痕跡が確認できた。このくびれ部の位置を墳丘主軸で反転した16.9mがくびれ幅となる可能性が高い。くびれ高についても等高線の状況から1.75mであると考えられる。

前方部は、墳丘南側は墳丘より下段の削平により墳端及び墳丘斜面が消失している。一方北側では、畠地造成による削平で墳端ラインがあるテラス面が狭くなっているものの墳端ラインが良好に遺存しているため、この北側の墳端ラインで前方部の復元をすると、前方幅19.3m、前方部長は27.5mとなる。また、この墳端ラインよりも外側に明瞭な傾斜変換線みられることから墳端外側のテラス面の存在¹⁰を考慮する必要がある。この墳端ラインまでを含めると前方幅19.6m、前方部長30.4mとなる可能性があることが確認できた。前方部北側から前方部端の墳丘斜面に標高158.000～158.500m等高線間にテラスが確認でき、墳端ラインと墳頂部の上端ラインとはほぼ平行していることから、段築であると考えられる。つまり前方部は後円部と同様2段築盛である可能性が高い。標高墳頂部については、遺存状況が良好で、幅が2.7mと狭く、前方部高は2mであった。これらの成果より、墳長は55m、テラスまで含めた全長は57.8mの前方後円墳であると想定できる。今後、墳端外側のテラスが墳丘を全周して設けられているのか、前方部の墳端位置を確認し前方幅を確定するためにも、発掘調査による確認が必要となろう。

4.まとめ

重政古墳は、これまで豊後大野市で測量調査をしてきた前方後円墳と同様、前方部があまり広がらず、低く平坦であることから、柄鏡状の墳丘形態であるといえる。これは、測量図(第3図)からもみてとれるが、測量で計測した座標から作製した3D図¹¹(第5～6図)でも明瞭に確認できる。また、同市に所在する古墳の立地についてもこれまで論じてきた(玉川2012・2014・2015・2016)が、台地または丘陵上の縁辺に築造され、古墳を認知させるという被葬者の空間利用を意識したような選地であるという共通性¹²がある。第5～5・6図は、古墳を三重盆地の下から仰ぎ見た図である。前方後円墳として認知させるためには、墳丘東側の中学校側からでは前方後円墳の円墳部分しか視認できない。盆地内の南北と北西方向からであれば、重政古墳が前方後円墳であることを認知できる。つまり、この方向に古墳として認知させたい対象があつた可能性が高いと考えられる。

今後、これまで豊後大野市で実施してきた墳丘測量調査で作製した測量図を基に、墳丘形態や築造時期、墳丘築造の選地について総合的に考えていくたい
(玉川)

(1) T-1・2をそれぞれ後円部とくびれ部付近の墳頂部に設置。

K-1: X= -2217.467, Y= 55057.791, Z= 161.216, T-2: X= -2210.870, Y= 55028.525, Z= 158.814

(2) 三重盆地の東側斜辺部に存在する前方後円墳である。発掘調査により、秋葉鬼塚古墳と同様に墳端の外側にテラスを形成し、周溝へと接続する形態であることが判明した。

(3) TINデータ¹³より3D図を作製。TINデータとは、不規則三角網(Triangulation Irregular Network)の略というデータで、地形表現に優れているという特徴がある。点群からそれぞれもっとも近い点とつなげ、三角形の集合体で立体を表現するものである。

(4) 古墳築造に当たり立地条件を決定する観念で、良い自然な地域を選定する個面のみならず、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性質をもつものである。今後、大野市中流域と上流域の集落及び古墳との関係性を深めて研究することにより、当時の奥肥後の社会構造が見えてくるものと思われる。これまで筆者は、「古地」として論じてきただが、「選地」とした。

【引用・参考文献】

- 細谷俊一 1992 「第5次大分県 重政古墳」「前方後円墳集成」九州編 株式会社山川出版
田中裕介 1995 「東九州における古墳時代の首長系譜の変遷と画期(上)・埴輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の幅年」『おおいた考古』第7集大分縣考古学会
諸岡 邦 1990 「三重県の前方後円墳」『おおいた考古』第5集 大分縣考古学会
諸岡 邦 1995 「大分縣三重県重政古墳の測量調査と採集埴輪について」『おおいた考古』第7集大分縣考古学会
諸岡 邦 1997 「重政道跡」『三重県(近畿道群)古墳調査概報』三重県教育委員会
諸岡 邦 1998 「重政古墳」『大分の古墳後円墳』大分県文化財報告書 第100号 大分県教育委員会
下村智・吉田和彦・玉川剛輔 2003 「古地におけるデジタル測量の研究―大分県下の古墳を事例として―デジタル測量」『九州考古学』78号九州考古学会
玉川剛輔 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
玉川剛輔 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3・平成22年度調査』 豊後大野市教育委員会
玉川剛輔 2014 「津生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4・平成23・24年度調査』 豊後大野市教育委員会
玉川剛輔 2015 「秋葉鬼塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5・平成25年度調査』 豊後大野市教育委員会
玉川剛輔 2016 「坊ノ原古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6・平成26年度調査』 豊後大野市教育委員会

3 重政古墳第2次調査

池田亘・小松義博・吉岡拓哉・玉川剛司・田中裕介

(1) はじめに

今年度から三重盆地のほぼ中心部に所在する前方後円墳である重政古墳の発掘調査を開始した。調査の目的は豊後大野市内で唯一墳丘平面形態や葺石の状況などは判明していない古墳であることと、築造年代を推定する資料が乏しいため、発掘調査を行って以上の資料をえることである。まずこれまでの重政古墳に関する調査研究史をまとめておきたい。

調査の経緯 重政古墳は大正時代の大分県史跡名勝天然記念物調査委員会の調査などすでに知られていて⁽¹⁾、そのとき前方後円墳として報告された古墳のひとつが重政古墳である。1965年ごろ三重中学校のグランド拡張工事の際に、当時当中学校の社会科教員であった故芦刈政治氏によって壺形埴輪の底部破片が採集されている⁽²⁾。1994(平成6)年には三重町教育委員会(諸岡郁)による25cm等高線による平板測量が、翌年には後円部の周辺に3本のトレンチを入れる調査が行われた。この年の調査を第1次調査とする。

第1次調査 1995(平成7)に行われた調査である⁽³⁾。三重中学校のグランドのバックネットフェンスの改修事業の事前調査として行われたもので、後円部の墳端と周溝の有無を確認する目的で行われた。後円部南側に設定した第1トレンチは、当初の地形を残す場所であったが⁽⁴⁾、墳丘斜面から流出して堆積した葺石と若干の壺形埴輪の破片を採集したもの、明確な墳端の葺石を見出すことはできず、グランド側に設けた第2、第3トレンチでは墳丘は完全に削平され墳端を見出すことはできなかった。

以来重政古墳についての調査は進展しないまま今回の第2次調査にいたった。

第2次発掘調査 今回も漆生古墳群の発掘調査に引き続き、豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって重政古墳の発掘調査を行った。現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2017(平成29)、12月19日(火)・20日(水)に表土剥ぎを、22日(金)～24日(日)、26日(火)～28日(木)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)としてその後1月20日まで、間欠的に考古学研究室の学生有志により調査をおこなった。その間2018(平成30)年1月8日には、豊後大野市の古墳文化を考える会(代表:渡辺円世)主催で現地説明会をおこなった。参加者は以下の通り。

職員・教員 諸岡郁(豊後大野市教委)、田中裕介・上野淳也・玉川剛司(別府大学)、井大樹(大分県立埋蔵文化財センター)、橋本幸治

学生 村田仁志(大学院2年)、塙見恭平、高木慎太郎、竹永昂平、後藤佳奈(以上大学院1年)、堺高太郎、吉岡拓哉、(以上学部4年)、岡元蓮、川村有紀、佐伯央央、清水航平、末光博史、島村夏輝、田口裕介、前田純子(以上学部3年)、久保園梨左、菅野真由、田川麻衣(以上学部2年)、下川達、高橋涉、浅川千聖、木崎晴崇、重岡菜穂、東美月、藤田俊平、本門拓也、森中明音、松永あづみ、水ノ浦宗一郎(以上学部1年)、諸岡初音(九州大学文学部1年)

図面整理とデジタルトレースには小松義博・吉岡拓哉・池田亘(大学院1年)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。なお本稿は以上4名と田中が協議して各自が成稿したものである。

基本層序 古墳群の造られた丘陵は阿蘇4溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵である。基盤層はこの凝灰岩層が風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第1層、その下の自然堆積層を第2層、盛土等の人为堆積層を第3層、基盤の凝灰岩層を第4層として、その層序の間に形成される人為的な面をアルファベットで記載した。(田中)

(1) 本庄昇・前田多三郎1924『三重郷の古墳』『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』3 大分県史跡名勝天然記念物調査会

(2) 諸岡郁1994『重政古墳出土の壺形埴輪について』『三重史談』11 三重史談会

(3) 諸岡郁1997『三重地区遺跡群発掘調査概報』II 三重町教育委員会。p 8-10

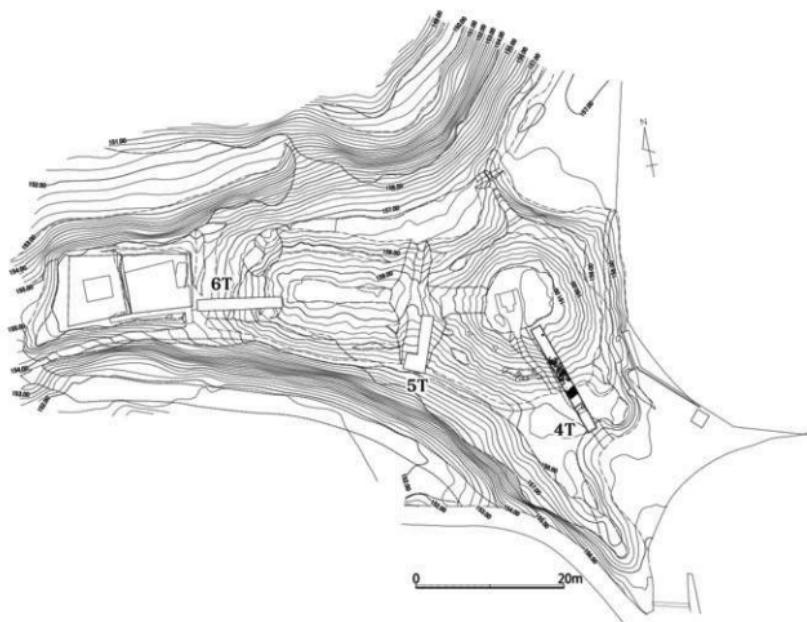
(2) 第4トレンチ

後円部の墳端と斜面における葺石の状況の確認、墳丘斜面における段築の有無、周溝の存否確認のため後円部南側の斜面から外周にかけて幅約1.5m×長さ11.5mの調査区を設定した。その際第1次調査の第1トレンチと重複しないように設定した。(第7図)

調査の進捗に従って記すと、表土第1層を剥ぐと、角礫、小土器片が含まれた軟質な暗黄褐色の層(第2層)が検出された。これは、斜面上部から落下した土砂と葺石の堆積と判断された。これを除去すると、葺石直上に堆積した黒褐色土層が露出した。トレンチの上部からは一見段のような掘込みが見つかったがその中に縱方向の立石の挿入があり、木柱を固定した後世の柱穴と考えられた。この付近には現在石製の鳥居があり、かつての木製の鳥居がこの位置に存在した可能性が高い。

また、トレンチ中部の流れ落ちた角礫を含む層は墳丘上部より流れ落ちた流土であると推定される。その第2層を取り除くと盛土と葺石が一部見られたが、2段目の段築の斜面、テラスは検出されず、第2層形成中に削平された跡があり、1段目の段築平坦面は、削平をうけたと考えられる。

トレンチ下部からは1段目段築の斜面と幅2.5mの周溝が検出された。墳端部の根石は20~30cm程であるのに対し、その他の葺石はやや小さく、20cm以下となっていた。1段目の斜面から墳端部にかけての平坦なところにまで敷設されていた。墳端部は周溝の三分の一まで平坦に葺石がつく墳端テラスが約80cmほど続き、その先端に根石が並んでいた。テラスと一段目斜面葺石の変換ラインには根石列ではなく、そのままテラスから葺き上げている構築状態であった。



第6図 重政古墳調査区配置図



第7図 重政古墳第4トレンチ配置図 (1/50)

周溝内には埴丘斜面から動いた葺石とともに黒褐色土が堆積していた。また、その下は2層からなる埋土があり、この層が埴端部の根石の下に潜り込んでいたため、いったん掘削した溝に埋土を行って整形したものと考えられ、その上面が葺石完成時の周溝の底面であると考えられる。さらに、その層を完掘すると、埴丘完成以前の周溝の垂直な掘込み跡が確認された。周溝から外側についてはコンクリートなどが投げ込まれ、ごく最近の擾乱である。

遺物については、第2層から壺形埴輪の各部の破片が出土している。いずれも、10cm以下の小破片で、葺石上に散在しており、供獻当初の位置を示すものではなかった。(吉岡)

(3) 第5トレーニング(写真参照)

くびれ部の位置を確認することを第一の目的に、周溝・段築の有無、斜面の葺石の状況を確認するため、埴丘測量の結果から南側埴丘の前方部と後円部の接合部と想定される箇所に、幅1.5m×長さ8mの調査区を設定した。さらに調査期間の後半に、西側に幅1.5m×長さ2.4mの調査区を拡張した。

トレーニング南東部において、人頭大の角礫を用いた葺石が確認できたたが、埴丘上部にあたるトレーニング北側では、二次的な改変により葺石は明確に確認できなかった。しかし一段目斜面の葺石とそこから埴端にのびる埴端テラスの葺石を検出した。葺石端の根石についてはすでに消失していた。埴丘1段目の平坦面にあたるトレーニング中央部から土壤が検出され、その上層からはカミソリらしき金属片が見つかり、後世の掘込みが基盤層まで達していたと考えられる。また、埴丘下部の調査区拡張部からも、埴丘に対してやや垂直方向に走るような溝状造構を検出した。これは堆積土中から近世の陶磁器片を確認した点に加えて、測量図に見える溝状の緩い落ち込みの位置と一致する点から、後世に切り通された溝と考えられる。上記の掘り込みや溝によって、その造構範囲内の葺石は取り除かれており、段築の存在は不明確である。周溝もまた、調査区内の範囲からは検出されなかつた。

層序としては、まず腐葉土の堆積層(第1層)があり、その下層は埴丘上部と下部で堆積の状況が異なる。埴丘上部では、黒色土が堆積している。これは埴丘造成前の地山である(第4層)。埴丘下部では、腐葉土層の下位に盛土の流土と思しき黒褐色土層(第2層)の堆積が見られ、その層中から土師器・埴輪片や、葺石を検出した。この層の下位面からは、建設当初の葺石が検出された。調査の結果、段築の様子や周溝の有無は確認できず、第1の目的であつたくびれ部の位置は確認することが出来なかつた。次年度の調査に課題は残された。

出土遺物は、壺形埴輪が破片にして数十点に上り、前述した通り黒褐色土層に多く、一部腐食土層にも見られ、集中した様子はない。今回の調査では、上部で発見された土坑を完掘できなかつたため、これも次年度に調査を繰り越すことになった。

(4) 第6トレーニング(写真参照)

前方部の埴端と段築、および周溝の存在を確認するための調査区であり、前方部西側の前端斜面に幅1.5m×長さ12mの範囲でトレーニングを設定した。

調査の結果、1段目斜面の葺石と最下部の根石列を発見し、そこから西側に向かい埴端外の平坦面を形成する敷石面が見られ、その根石も検出された。第4と第5トレーニングで認められた埴端テラスと同一の葺石である。葺石は10~20cmの大角礫である。トレーニング東側に上部でも葺石が厚く堆積している様子が見られた。その部分を取り除くと、1段目平坦面とそこから上方に伸びる二段目斜面の葺石があらわれた。傾斜が変化するラインでは石の目地が通っており、平坦面の葺石を行ってから、二段目斜面を葺きあげたことが観察された。平坦面には3cmほどの砂利石のような小さい円礫の集まる箇所が2か所見つかっている。斜面には後世の掘削も所々に見られ、トレーニング下部で埴丘外の位置から、50cm幅程度の土壤が見つかった。長さもトレーニング北壁面から僅かに覗く程である。また調査区内において、周溝は確認されなかつた。

層序は、まず腐葉土とされる暗茶色土層(第1層)、続いて造成された墳丘が崩れて堆積した流土層(第2層)である。その下層はトレンチの上部と下部で堆積が異なる。そしてトレンチの上部では、その下に盛土層(第3層)、トレンチ下部では地山となる明茶褐色土層(第4層)の堆積が見られる。

出土遺物としては、壺形埴輪の破片が出土している。これらは流土層中で、葺石より高い位置で検出されたが、点在しているようであり、本来の位置からはなれていると思われる。

今回の調査では、第4トレンチと同様な周溝は確認されなかった。墳端の位置は確定できたが、墳端テラスの平坦面の広がる範囲などを特定することができなかつたため、次回の調査において、別の箇所に調査区を設ける予定である。(池田)

(5)まとめ

重政古墳は墳長50mを超える前方後円墳である。後円部の北側と東側は1960年代のグランド造成工事で墳端に当たる部分が削平されている。西端は墓地になっているため墳端が明確ではなかつた。測量調査の結果からもその状態はみてとれ後円部北側から北側くびれ部にかけても、大きく削り込まれている状況であった。そのため発掘調査を実施して墳丘各部位の墳端を確認するとともに、段築の状況を追跡することで墳丘形態を復元する資料を得ることを考えた。同時に埴輪資料の充実を図ることが所期の目的である。

調査の結果 第1の目的である墳端の検出は、後円部の第4トレンチとくびれ部第5トレンチ、前方部前端の第6トレンチの3か所で成功した。しかし後円部と前方部の接点であるくびれの屈折部をねらって第5トレンチではその位置を検出できなかつた。あわせて墳端には各トレンチで墳端から葺石を延長した墳端テラスが存在することが判明した。周溝については後円部の第4トレンチで幅2.5mの溝を確認したが、くびれ部と前方部では同様の造構は確認できなかつた。

第2の目的である段築については前方部前端の第6トレンチで一段目平坦面に葺石があることと2段目斜面の葺石を確認し、前方部は二段築成であることが判明した。後円部第4トレンチとくびれ部の第5トレンチでは、流出と後世の改変により、段築部分は判明しなかつた。

第3の目的である埴輪の採集については、各トレンチで一定の量の壺形埴輪片を見出した。とくに前方部前端にも埴輪が存在すること判明したことは、埴輪の供獻位置を考える材料となる。いまのところ円筒埴輪ではなく、壺形埴輪も單口縁形態のものばかりである。

墳端に葺石の敷設したテラスを設けるのは、三重地域の前方後円墳では、道ノ上古墳、小坂大塚古墳、秋葉鬼塚古墳で見ることができる。この地域の古墳の構築の特徴と考えることができる。(田中)

なお重政古墳の発掘調査は日本学術振興会科学研究費助成事業(基盤研究B)「阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達、文物交流の実証的研究」(研究代表者: 杉井健 課題番号26284122)の成果の一部である。



重政古墳遠景



重政古墳近景



重政古墳第4トレンチ



重政古墳第4トレンチ



重政古墳第5トレンチ



重政古墳第5トレンチ



重政古墳第6トレンチ



III 鍋倉北遺跡（神戸口墓地・辻墓地）

調査の概要

鍋倉北遺跡は奥岳川との合流点より南500m付近の中津無礼川に面した台地端で、北東方向に向かって緩やかに傾斜する尾根上に位置する。周辺は谷地形が入り組む急峻な山地であるが、字神戸口・辻・ウトフキの3箇所に近世墓地群が所在する。現在周辺には集落はないが、字井ノ川平付近に過去に集落が存在したとみられ、その集落跡を見下ろす丘陵上に墓地は立地する。近世は井崎村の範囲と思われ、明治以後宇田枝村の一部となって現在に至る。

遺跡内において現在設置されている太陽光発電施設の日照の障害となっている樹木伐採や土砂採取等の開発計画の照会があった。そこで県教委と現地確認を行ったところ、神戸口墓地が開発対象地域に該当することを確認して事前に調査を行うこととし、近隣の辻墓地も工事道路に近いことから併せて調査を行った。しかしその後開発計画は一転して一部の樹木伐採のみに変更し、墓地は現状のまま保存されることになった。調査は神戸口墓地及び辻墓地に所在する墓石の銘文資料及び墓石配置図の実測、写真撮影を実施し、発掘は行わなかった。

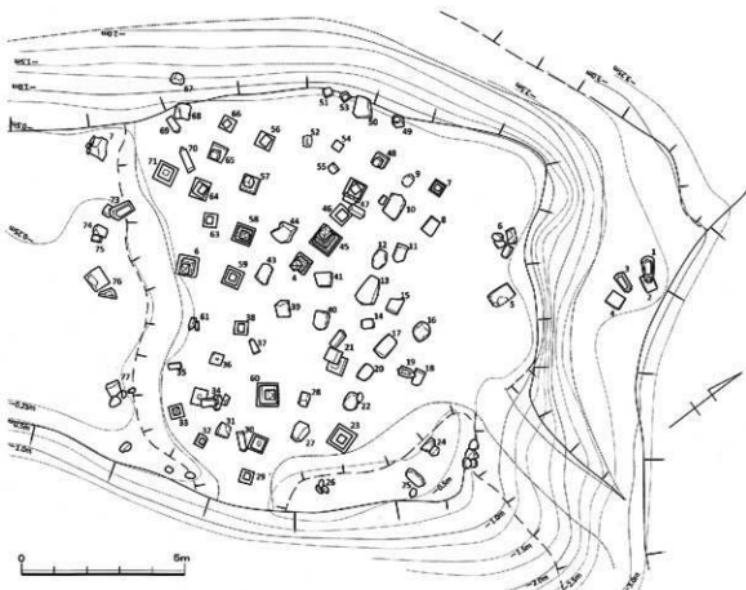
墓地について

神戸口墓地は尾根先端上を上下2段の平坦地形に均して造られたとみられ、大部分の墓石は上段敷地に所在している。下段の敷地は後世の掘削で失われているとみられ詳細は不明であるが、南西方向から続く道跡ともみられる地形であり、墓石4基(1~4)は上段からの転落の可能性もあるなど、下段の墓石配置については現況では不明確である。上段は東西13m、南北11mの長方形形状の平坦な敷地に73基(5~77)が並べられている。その東側斜面には集落方面へ下る道があり、墓地の入口と思われる。

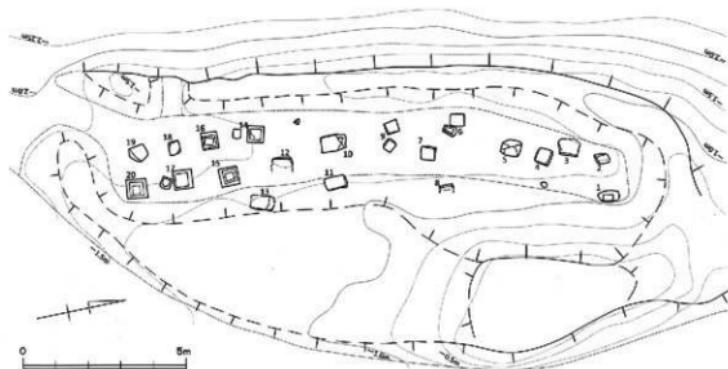


第8図 鍋倉北遺跡周辺地形図

辻墓地は神戸口墓地より水平距離で約100m強離れた同じ尾根の上方に所在している。尾根頂上の道よりやや西側に隣接するよう平垣に均されており、東西3m、南北16mの細い長方形の敷地に20基が並んでいる。西側斜面に沿って浅い土塁状の盛土に囲まれているが、南側に土塁の途切れた箇所が2箇所あり、墓地の入口と思われる。



第9図 神戸口墓地配置図 (1/150)



第10図 辻墓地配置図 (1/150)

墓石について

墓石について、神戸口墓地は77基、辻墓地は20基を数えているが、塔身のみや基礎のみなど倒壊により基礎と塔身が離れているものもあり、神戸口墓地は本来70基程と思われる。その内訳はいわゆる墓碑としての石塔形式以外として、伏碑と呼ばれる扁平な大型石材が置かれているもの、やや小型石材を複数寄せ集めた墓標らしき石組形式と様々な形式があり、内訳は第1・2表のとおりである。

このうち伏碑については形・大きさも様々で、加工痕はみられないことからほぼ自然石と思われ、銘文等も全くない。概ね長方形形状の石材である以外に大きさ・形状に規則性はなく、すべてが墓標とは限らないが、40基を数えられる。石組墓は3~4個体の礫の集石で、神戸口墓地で5基を数えているが、伏碑と同様すべて墓標かどうかは不明確である。

墓碑については近世墓として一般的な石塔の形式で元文2年から明治28年までの紀年銘を有し、150年程造営されたことが確認できるが、神戸口・辻共に同時期に造営された墓地と考えられる。形態的には位牌形および方柱形が大半を占め、頂部および花菱形により分類を行った。(第3表)墓碑形態の正面観で厚みの少ない神戸口1号墓と辻1号墓の2基以外は角柱状であるが、頂部の形状が半円形の位牌形のものをA型、角錐状に尖る方柱形をB型、B型ほど尖らないが四隅をわずかに反り上げる形状のものをC型とし、仏像形式のもの1例をD型としている。また塔身の長さも様々で、A・B型で極端に短いものをそれぞれA'型・B'型としている。花燐形については上半の形態でア~キの7種に分類している。

第1表 神戸口墓地 墓石一覧

No	種類	備考
1	墓碑	塔身のみ(元文2)
2	伏碑	表面整形 長方形
3	墓碑	塔身のみ(宝曆7)
4	墓碑	基礎のみ
5	伏碑	粗加工 長方形
6	石組墓	粗い不定形の角錐5
7	墓碑	基礎3段・塔身(宝曆9)
8	伏碑	粗い略長方形
9	伏碑	粗い精円形? (埋没で未確認)
10	伏碑	表面整形 略長方形
11	伏碑	粗い略長方形
12	伏碑	粗い精円形? (埋没で未確認)
13	伏碑	表面整形 略長方形
14	不明	彫形石材に削抜き
15	伏碑	粗い略長方形
16	伏碑	粗い精円形
17	伏碑	粗い略長方形
18	伏碑	粗い略長方形
19	墓碑	舟形光背・地蔵? 半肉彌 倒壊
20	伏碑	やや整形の略長方形
21	墓碑	倒壊 基礎3段・塔身(明治28)
22	伏碑	粗い精円形? (埋没で未確認)
23	墓碑	基礎3段・塔身(明治25)
24	石組墓	角錐1(粗い三角錐)円錐2
25	伏碑	精円形の川原石
26	石組墓	円錐2

No	種類	備考
27	伏碑	粗い略精円形
28	伏碑	粗い長方形
29	墓碑	基礎1段・塔身(天保5)
30	墓碑	基礎2段・塔身(天保5)
31	伏碑	粗い略三角形
32	墓碑	基礎1段・塔身(天保9)
33	墓碑	基礎1段・塔身(文久元)
34	墓碑	基礎3段・塔身(倒壊)(天保9)
35	墓碑	塔身のみ(明和5)
36	墓碑	35か37の基礎?
37	墓碑	塔身のみ(弘化4)
38	墓碑	基礎2段・塔身(天保10)
39	伏碑	粗い略長方形
40	伏碑	粗い略長方形
41	伏碑	粗い略長方形
42	墓碑	基礎3段・塔身(明治2)
43	伏碑	粗い略精円形
44	伏碑	粗い略長方形
45	墓碑	基礎4段・蓮華座・塔身(明治17)
46	墓碑	基礎3段のみ
47	墓碑	基礎3段・蓮華座・塔身(倒壊)(明治20)
48	墓碑	基礎2段・塔身(寛政3)
49	墓碑	塔身のみ(宝曆11)
50	伏碑	表面整形 不定形
51	墓碑	塔身のみ(明治3)
52	伏碑	粗い略精円? (埋没で未確認)

No	種類	備考
53	墓碑	塔身のみ(文化11)
54	墓碑	51か53か55の基礎?
55	墓碑	塔身のみ(埋没)(文化7)
56	墓碑	基礎1段・塔身(文政元)
57	墓碑	基礎1段・塔身(文政9)
58	墓碑	基礎2段・塔身(明治19)
59	墓碑	基礎2段・塔身(明治26)
60	墓碑	基礎2段・塔身(文化10)
61	石組墓	長方形形状の粗い角錐3
62	墓碑	基礎2段・塔身(明治22)
63	墓碑	基礎1段・塔身(明治6)
64	墓碑	基礎2段・塔身(天保3)
65	墓碑	基礎1段・塔身(天保2)
66	墓碑	基礎1段・塔身(寛政8)
67	伏碑	粗い長方形
68	伏碑	粗い長方形? 樹木で一部不明
69	墓碑	塔身のみ(明治2)
70	墓碑	No.71の塔身? (明治9)
71	墓碑	基礎3段のみ(No.70?)
72	伏碑	粗い長方形 破片4
73	墓碑	塔身のみ、不明石材(弘化4)
74	墓碑	塔身のみ(文政元)
75	墓碑	塔身のみ(寛政2)
76	墓碑	基礎3段のみ、破片
77	石組墓	長方形形状の粗い角錐1、円錐4

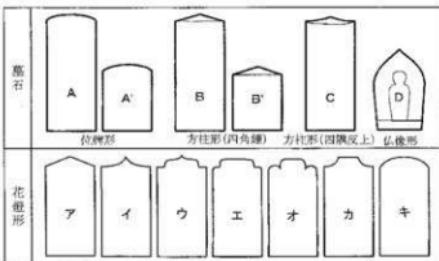
第2表 辻墓地 墓石一覧

No	種類	備考
1	墓碑	基礎2段・塔身(安永9)
2	伏碑	粗い自然石 不定形
3	伏碑	自然石 長方形
4	伏碑	表面加工 方形
5	伏碑	自然石 精円形
6	墓碑	基礎2段・塔身(宝曆1)
7	伏碑	自然石 長方形

No	種類	備考
8	伏碑	自然石 埋没により不明
9	墓碑	基礎2段・塔身(寛延4)
10	伏碑	粗い自然石 長方形
11	伏碑	長方形
12	伏碑	粗い自然石 長方形
13	伏碑	粗い自然石 長方形
14	墓碑	基礎2段・塔身(明治1)

No	種類	備考
15	墓碑	基礎2段・塔身(文化7)
16	墓碑	基礎2段・塔身(文久3)
17	墓碑	基礎2段・塔身(天明8)
18	伏碑	粗い自然石 方形
19	伏碑	粗い自然石 五角形
20	墓碑	基礎3段・塔身(天保4)

墓石の形状から考えられる編年として、混在する時期も多いもののA→B→Cの順に出現する傾向がある。A型は18世紀中頃より19世紀世纪中頃に主体的で、やや後出する短いA'型は18世紀後半頃～19世紀中頃が多く、B型も19世紀中頃～後半以降に主体的になるがB'型はやや先行する18世紀後半で、Cは19世紀後半以降に現れる。花崗形については山形のア・イ型が最も古く、以後工型が圧倒的多数を占めるようになる。途中ウ・オ型も現れるが数量は少なく、工型が19世紀後半まで主体的に存続する。カ型やキ型は工型とはほぼ同時期の出現であるが、共に1例しかなく時期的な変遷は明確でない。



第11図 墓跡・花崗形の分類図

まとめ

墓碑と伏碑の配置関係について、神戸口墓地は上段敷地の中央付近に伏碑が並べられ、墓碑の多くが周辺に位置していることから墓地造成当初の墓石配置順としては墓碑より伏碑が先行する可能性が高い。入口から中心付近にかけて伏碑が造営された後に墓碑形式に変化していくと思われ、18世紀中旬から19世紀初めにかけて周囲の空いた位置に、19世紀中頃は主に墓地南側付近に墓域を拡大していき、19世紀後半は敷地不足からか再び墓地中央付近に造られたと考えられる。

伏碑の造営時期は銘文はなく不明であるが、基數から墓碑造立までの主要な墓石として長期にわたって造営されたと考えられる。辻墓地も数は少ないが同様の変遷を辿っていることがうかがわれる。石組墓は墓地の周辺に配置されている状況から時期的には伏碑より墓碑に近いと考えられるが、今のところ墓碑との違いについては明確でない。

なお、伏碑については、下藤遺跡や西寒田遺跡などで確認された17世紀初頭のキリストン墓の墓碑形式との類似性から、やや時期の下るキリストン墓碑との見方もある。伏碑はキリストン墓碑の退化した形式とすれば、転びまたは潜伏信仰者の墓石の可能性もなくはないが、キリストンとの関連は、発掘も行っていない以上不明である。

また、被葬者の関係や没年から推定して、神戸口は2～3世帯、辻墓地は1世帯程度の家族墓地であると考えられる。なお、ウツフキ墓地は1世帯とみられ、計4～5世帯の集落であったと思われる。ウツフキ墓地は近年まで墓地の造営は行われているが、神戸口・辻両墓地とも明治期以後廃絶している。

井ノ川平の集落について住民もなく子孫も不詳のため資料に乏しく、集落の詳細は不明である。また、近世墓石の調査は市内では初めての調査で、墓地の調査例では下野遺跡（犬飼町下津尾）、五郎丸近世墓地（千歳町新殿）、郡山南遺跡（大野町郡山）で墓壙遺構の調査が行われているのみで、この地域の墓石の詳細については、今後の調査例の増加によって明らかにしていきたい。

参考文献

- 神田高士ほか2016『下藤地区キリストン墓地』臼杵市教育委員会
- 田中裕介2012『御靈園クリスチヤン墓地の調査』『大分県地方史』214 大分県地方史研究会
- 田中裕介2014『キリストン墓地の調査』『キリストン墓と中国人墓にみる大航海時代の外來墓制に関する基礎的研究』別府大学
- 原田昭一1997『下野遺跡 上津尾遺跡』犬飼町教育委員会
- 豊田徹士2008『五郎丸近世墓地群』千歳町教育委員会
- 後藤幹彦2003『郡山南遺跡 大野地区遺跡発掘調査報告書Ⅲ』大野町教育委員会

第3表 神戸口・辻墓地 墓碑一覧(1)

No.	現況	法量(cm)	分類	銘文	紀年	被葬者	
1	塔身のみ	塔高65、幅28 ~33	A ア	(正面)元文二丁巳天 飯一本覺妙真信女 三月 四日	元文2 (1737)	? (? - 1737)	
3	塔身のみ	塔高54cm、幅 21~22	A エ	(正面)宝暦七丁丑天 一超了三信士 正月廿日 (左面)和田新三事	宝暦7 (1757)	和田新三(? - 1757)	
4	基礎のみ	49×41、高さ 13					
7	基礎2段・塔身	基礎41×41 総高58	B' キ	(正面)宝暦九己卯天 法名釋尼妙運 二月十五 日 (右面)衛藤圓口母	宝暦9 (1759)	衛藤圓平母(? - 1759)	
19	地蔵像?(倒壊)	總高51+柄6 幅26	D				
21	(倒壊)基礎2 段・塔身	基礎58×? (埋没)總高91	C エ	(正面)霧林智月信女 (右面)明治廿八年旧十一 月廿四日 (左面)衛藤与一郎妻 行年二十三才	明治28 (1895)	衛藤与一郎妻 (1872-1895)	
23	基礎2段・塔身	基礎68×67 総高82	C エ	(正面)圓室如鏡信女 (右面)明治二十五年 親旧 七月二十七日 (左面)衛藤松平妻 行年五十九才	明治25 (1892)	衛藤松平妻 (1833-1892)	
29	基礎1段・塔身	基礎37×37 総高41	A エ	(正面)智性童子 (右面)天保五年六月十五日 (左面)忠兵衛 子 三才	天保5 (1834)	忠兵衛子(1831- 1834)	
30	基礎2段・塔身	基礎55×54 総高73	A エ	(正面)蘭峯恵秀信女 (右面)天保五年七月二 日 仁右エ門妻 (左面)八十二才	天保5 (1834)	仁右エ門妻 (1752-1834)	
32	基礎1段・塔身	基礎31×29 総高40	A エ	(正面)荷月貞王信女 (右面)天保九庚午年四月五 日 (左面)忠兵衛 妻	天保9 (1838)	忠兵衛妻(? - 1838)	
33	基礎1段・塔身	基礎44×44 総高60	C エ	(正面)飯元誠岩良忠信士 (右面)文久元辛酉年 (左面)六月廿日 衛藤忠兵工	文久元 (1861)	衛藤忠兵工(? - 1861)	
34	基礎2段・塔身 (倒壊)、円錐	總高57 塔身 40	A エ	(正面)澤道全水信土 (右面)天保九庚午年 八月 廿六日 (左面)松五郎事	天保9 (1838)	松五郎(? - 1838)	
神戸口墓地	35	塔身のみ	塔身41	A エ	(正面)實山相性信士 (右面)明和五子天 四月 十七日 (左面)衛藤松右エ門妻	明和5 (1768)	衛藤松右エ門妻 (?-1768)
	36	基礎のみ	基礎34×33				
	37	塔身のみ	塔身44	A エ	(正面)早世智旭童子 (右面)弘化四未歳 五月 四日 忠兵エ子	弘化4 (1847)	忠兵エ子(? - 1847)
	38	基礎1段・塔身	基礎41×40 総高40	A' エ	(正面)积了心 (右面)天保十亥天 十月□日 (左面)江藤荘代左エ門	天保10 (1839)	江藤荘代左エ門 (?-1839)
	42	基礎2段・塔身	基礎49×49 総高70	B エ	(正面)玉堂智臺信女 (右面)明治二年巳四月三 日 (左面)普和作妻行年四十八才	明治2 (1869)	普和作妻(1821- 1869)
	45	基礎3段・蓮華座 ・塔身、石造物	基礎73×71 総高122	B エ	(正面)大安院本源性居士 (右)明治十七天甲 申旧五月二十六日亡 (左)圓部和作口七十団才	明治17 (1884)	圓部和作口 (1810-1884)
46	基礎2段のみ	基礎16×46 高さ31					
47	基礎2段・蓮華座 ・塔身(倒壊)	基礎58×56 総高95	B エ	(正面)寂靜軒貞光信女 (右)明治廿四年九月 廿四日亡 (左)圓部和作妻ヒナ口	明治24 (1891)	圓部和作妻ヒナ口 (?-1891)	
48	基礎1段・塔身	基礎40×38 塔身32	A' エ	(正面)澤惠信士 (右)寛政三亥天 (左)五月十 七日衛藤左小衛門	寛政3 (1791)	衛藤左小衛門(? - 1791)	
49	塔身のみ	塔身31	A' エ	(正面)积惠深 宝暦十一巳天 二月二十四日 (右)宿名神右エ門 (左)	宝暦11 (1761)	神右エ門(? - 1761)	
51	塔身のみ	塔身31	A' エ	(正面)願心信士 (右)天明三癸卯年九月朔日 (左)孫口口	天明3 (1783)	孫口口(? - 1783)	
53	塔身のみ	塔身32	A' エ	(正面)法名积足妙暉 文化十一戌天 九月三十 日 (右)衛藤辰平女房	文化11 (1814)	衛藤辰平女房(? - 1814)	
54	基礎のみ	基礎32×31					
55	塔身のみ(埋没)	塔身27	A' エ	(正面)法名积西入 文化七午天十月廿一日(右) 新兵衛孫 吉五郎叟二才 (左)埋没により不明	文化7 (1810)	新兵衛孫 吉五郎 (1808-1810)	

第4表 神戸口・辻墓地 墓碑一覧(2)

No.	現況	法量(cm)	分類	銘文	紀年	被葬者
56	基礎1段・塔身	基礎15×44 総高64	A'工	(正面)澤言念信女 (右)文政元寅年七月二十七日 (左)衛藤新兵衛	文政元 (1818)	衛藤新兵衛(?-1818)
57	基礎1段・塔身	基礎14×47 総高53	A'工	(正面)澤了玄征生 (右)文政九年天九月十七日 (左)衛藤音平	文政9 (1826)	衛藤音平(?-1826)
58	基礎2段・塔身	基礎61×61 総高89	C工	(正面)真室妙源信女 (右)明治十九年三月十一日 (左)衛藤太吉妻往年六十五才	明治19 (1886)	衛藤太吉妻(1821-1886)
59	基礎2段・塔身	基礎55×55 総高110	C工	(正面)阪真太郎越居士 (右)明治二十六年旧二月九日 (左)衛藤太右門行年八十才	明治26 (1893)	衛藤太右門(1813-1893)
60	基礎2段(最下段は伏碑?)・塔身	基礎76×60 総高128	B工	(正面)朴道宗質信女 (右)衛藤仁右門叟 (左)文化十癸酉天正月□	文化10 (1813)	衛藤仁右門(?-1813)
62	基礎2段・塔身	基礎61×? (埋没) 総高75	C工	(正面)間峰智哉信女 (右)明治二十二年旧十二月十四日 (左)衛藤友三郎 行二十六才妻オクニ	明治22 (1889)	衛藤友三郎妻オクニ(1863-1889)
63	基礎1段・塔身	基礎40×40 総高50	A才	(正面)法名积妙念 (右)明治六西六月廿七日 (左)衛藤新平賀年四十才	明治6 (1873)	衛藤新平始(?-1873)
64	基礎2段・塔身	基礎64×63 総高68	A'工	(正面)积善裕 (右)天保三辰年七月晦日 (左)衛藤太右門	天保3 (1832)	衛藤太右門(?-1832)
神戸口墓地	65 基礎1段・塔身	基礎45×45 総高48	A'工	(正面)积尼明信 (右)天保二卯年 (左)十一月十五日 (左)衛藤太右門母	天保2 (1831)	衛藤太右門母(?-1831)
66	基礎1段・塔身	基礎41×41 総高42	A'工	(正面)积尼妙言信女 (右)寛政八辰年七月十七日 (左)衛藤太右門母	寛政8 (1796)	衛藤太右門母?(?-1796)
69	塔身のみ	塔身46	B工	(正面)智春童女 (右)明治廿五年旧四月七日 (左)行年六才衛藤友三郎娘	明治25 (1892)	衛藤友三郎娘(1886-1892)
70	塔身のみ	塔身64	A工	(正面)阪元徳室妙信女 (右)明治九子久四月廿三日 (左)行年八十五才衛藤太右門妻	明治9 (1876)	衛藤太右門妻(1791-1876)
71	基礎2段のみ	基礎61×61 総高104				
73	塔身のみ、不明石材	塔身52	A'工	(正面)法名积妙春信女 (右)弘化四未天二月二十九日 (左)孫四良妻行歳五十八年 (左)	弘化4 (1847)	孫四良妻(1789-1847)
74	塔身のみ	塔身35	A'才	(正面)积退道 (右)文政元寅天十二月三日 (左)エ藤辰平妻	文政元 (1818)	エ藤辰平(?-1818)
75	塔身のみ	塔身29	A'工	(正面)屎藤信士 (右)寛政二戌年 (左)正月廿日孫□	寛政2 (1790)	孫□(?-1790)
76	基礎2段のみ、破片	基礎62×62 一部不明				
1	基礎1段・塔身	基礎68×35 総高47	A'工	(正面)积妙亮信女 安永九庚子年 二月十一日 (右)市之助母六十六才	安永9 (1780)	市之助母(1714-1780)
6	基礎1段・塔身	基礎44×38 総高44	Aイ	(正面)积西元盡 宝曆元□未天 十一月十七日 (右面)大神氏信口 俗名治良貞	宝曆1 (1751)	治良貞(?-1751)
9	基礎1段・塔身	基礎37×37 総高48	A'イ	(正面)积尼妙口□ 寛延口辛□天 正月三日 (右面)金口母 (左面)治良貞妻	寛延4 (1751)	治良貞妻 金三十?母(?-1751)
14	基礎2段・塔身	基礎53×53 総高65	A'工	(正面)积現成 明治元辰年十一月三十日 (右面)エ藤右吉 行年八十一才	明治1 (1868)	衛藤右吉(1787-1868)
15	基礎2段・塔身	基礎55×? 総高55	A'工	(正面)积淨了 文化七年七月二十七日 (右面)俗名孫平 六十七才	文化7 (1810)	孫平(1743-1810)
16	基礎2段・塔身	基礎45×44 総高72	A'工	(正面)积尼妙郎往生 (右面)文久三年亥年十二月十一日 (左面)衛藤伝左工門母 行年八十一才	文久3 (1863)	衛藤伝左工門母(1782-1863)
17	基礎2段・塔身	基礎57×57 総高55	A'才	(正面)积了善往生 (右面)天明八申天十二月二日 (左面)金三十 六十七	天明8 (1788)	金三十(1721-1788)
20	基礎2段・塔身	基礎59×59 総高53	A'工	(正面)积妙泰位 (右面)天保四巳天正月十八日 (左面)卯吉母 行年八十二歳	天保4 (1833)	卯吉母(1751-1833)



鍋倉北遺跡（神戸口墓地）



鍋倉北遺跡（辻墓地）

IV 一千庵遺跡

調査の概要

調査区は大野町東端の台地地形上である。周辺には縄文・弥生時代の遺構が調査された岡遺跡や、旧石器時代の小牧A・B遺跡などが各台上に分布している。開発予定範囲に計3箇所の調査トレンチを設定し、幅1mで長さは延120mを重機により表土剥ぎを行った。

表土及び黒色土層の堆積が1・2トレンチで40~50cm、3トレンチでは70cm程を確認したが、造成を受けたような痕跡がある上、樹根による搅乱がいくつかみられた。1トレンチで土坑跡らしい窪みがあり、部分的に掘り下げたものの遺物等ではなく、深さも20cm程の浅い皿状で遺構かどうか明確ではない。それ以外の顕著な遺構・



第12図 一千庵遺跡周辺地形図



第13図 一千庵遺跡調査位置図

遺物は全く確認できず、地名から寺院跡の可能性も考えられていたが、特に手掛かりはみられなかった。



一千庵遺跡調査写真

V 下自在東遺跡

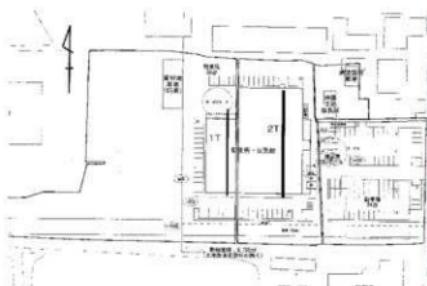
調査の概要

調査区は緒方川によって形成された緒方盆地地形上である。旧県立緒方工業高校跡地に市役所支所・公民館建設の計画により、予定地内に計2箇所の調査トレンチを設定した。1トレンチは幅0.6m長さ45m、2トレンチは幅1m長さ55mで、重機による表土剥ぎを行った。

表土層下より水田跡と思われる粘土層を検出したが、礫が混入するなど客土とみられる土層が顕著にみられた。昭和38年に学校建設の際の大幅な造成跡と思われる。部分的に深掘りして確認を試みたが、遺構・遺物は全く検出できなかつたため、工事着手に問題なしと判断した。



第14図 下自在東遺跡周辺地形図



第15図 下自在東遺跡調査位置図

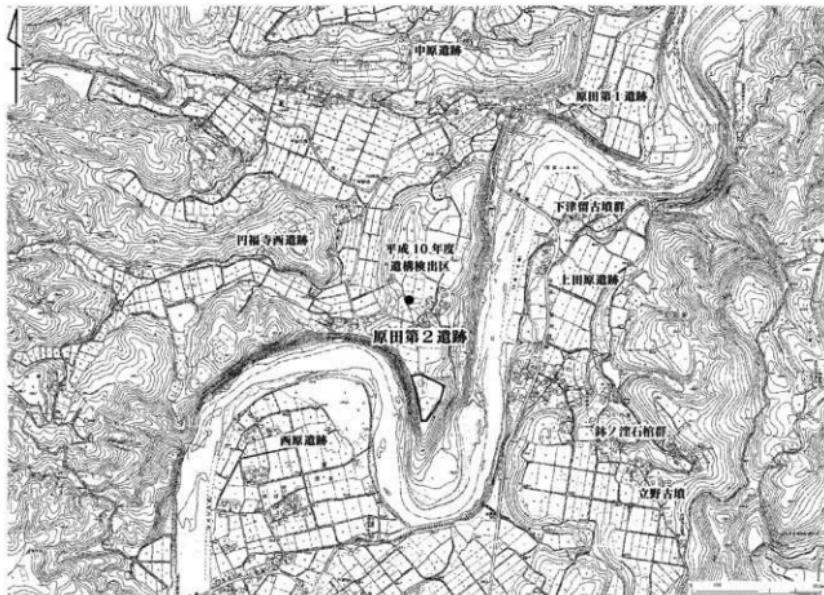


下自在東遺跡調査写真

VI 原田第2遺跡

調査の概要

千歳町原田地区の大野川に面した南北に細長い台地上に位置する。古くから石器等が採集されており、昭和49年には竪穴住居跡が確認されているほか、平成10年度には旧石器時代の包含層や、縄文・弥生時代の遺構や遺物が調査されるなど、旧石器時代から弥生時代の遺跡として知られている。特に宅地である台地中央付近に遺構や遺物の出土が集中している。



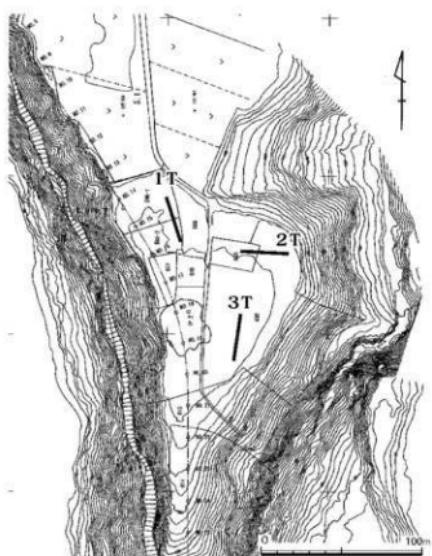
第16図 原田第2遺跡周辺地形図

今回の調査区は、過去の遺構検出区域より300m南に位置する山林である。三方を大野川蛇行部分の急斜面に囲まれた台地南端で、南に窄まる平坦地形上である。太陽光発電施設の計画に伴い、遺構・遺物の検出が予想されることから、掘削予定箇所を対象として調査トレンチを設定した。トレンチは幅1m長さ30mを3箇所で、樹木伐採作業の合間に重機による表土剥ぎを行った。

第1・3トレンチは30~40cm、第2トレンチは60~80cmの黒色土の堆積があり、その下層よりローム層を検出した。一部樹根による攪乱を除けば土層の状況は良好であったが、遺構・遺物は全く検出できず、遺跡の範囲は台地南端までは広がってはいないと思われる。

参考文献

- 芦刈政治「原始・古代」「千歳村誌」昭和49年 千歳村誌刊行会
豊田徹士編「大迫遺跡徳原地区 原田第2遺跡原地区」1999 千歳村教育委員会



第17図 原田第2遺跡 調査位置図



原田第2遺跡調査写真

報告書抄録

フリガナ	ブンゴオオノシナイセキハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書名	豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書9
副書名	平成29年度調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田中裕介 玉川剛司 池田亘 小松義博 吉岡拓哉 諸岡 郁
編集機関	豊後大野市教育委員会
所在地	〒879-7131 大分県豊後大野市三重町市場1200番地
発行年月日	平成31年3月15日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード 市町村:遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
シゲマサ 重政古墳	ブンゴオオノシオマサエマタ 豊後大野市三重町 内田字重政	44212 212062	32°58'43"	131°35'20"	2017.12.19 ~2018.01.23	55m ²	確認調査
ナヘクラ キタ 鍋倉北遺跡	ブンゴオオノシオカワマサ 豊後大野市清川町 宇田枝字神戸口・辻	44212 212154	32°57'27"	131°31'37"	2017.06.16 ~2017.07.20		測量調査
イッセンアン 一千庵遺跡	ブンゴオオノシオシマツ 豊後大野市大野町 ウシロダ 後田字一千庵	44212 212477	33°02'38"	131°34'07"	2017.09.28 ~2017.09.29	120m ²	確認調査
シモジサイヒカン 下自在東遺跡	ブンゴオオノシオシカワマサ 豊後大野市轄方町 オカニ 馬場字大石	44212 212201	33°58'13"	131°28'23"	2018.02.06	87m ²	確認調査
ハラダ 原田第2遺跡	ブンゴオオノシオトモハラ 豊後大野市千歳町 マツコ 前田字八津原	44212 212626	33°00'36"	131°34'46"	2018.02.08	90m ²	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
重政古墳	墳墓	古墳	葺石・周溝・段築	壇形埴輪	前方後円墳増長 55m、2段 築成で1段目2段目とも葺石あり 埴輪に葺石によるテラスをめぐらせる
鍋倉北遺跡	墳墓	近世	墓石群・伏碑		地上施設の調査
一千庵遺跡	散布地				
下自在東遺跡	散布地				
原田第2遺跡	散布地				

豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書9
平成29年度調査

発行日 2019年3月15日発行

編集・発行 豊後大野市教育委員会

〒879-7131 豊後大野市三重町市場1200